

ヒューム因果論と生存的本能

2020年10月9日

青木眞澄

はじめに

本発表は、18世紀スコットランドの哲学者デヴィッド・ヒュームの『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*)および『人間知性研究』(*An Enquiry Concerning Human Understanding*)¹で展開される因果論において見え隠れする「生存的本能」の役割を明らかにするものである。本発表は、ヒュームの言う因果推論、すなわち我々が原因される対象から結果とされる対象へと観念の移行を行う際の、移行の本性に関わる問題を扱うものである。ヒュームによる「因果推論は理性に基づかず、自然な観念連合の原理に基づく」という主張は有名であるが、この「観念連合に基づく」とされることの意味は、やや不明瞭である。本発表は、このことの意味を探る中で、推論の移行の「一瞬性」に注目し、主に『人間知性研究』において断片的に言及される「生存的本能」の役割をここに見出すことを目標とするものである。

1. 問題設定：因果推論の本性に関わる問題の所在

ここでは本発表の問題設定として、『人間本性論』第一巻第三部第六節「印象から観念への推理について」において、我々が原因とされる対象から結果とされる対象へと観念の移行を行う際の、この「移行の本性」(T1.3.6.3)が問題とされる箇所を解釈を通じて、「我々の因果推論が観念連合の原理に基づいている」というヒュームのこの箇所での結論に、通説で理解されている以上の意味があることを示す。

ヒュームが因果推論に理性的根拠が認められないことを論じる有名なこの箇所は、主に哲学史の教科書などで帰納推理の正当化に関する懐疑論の提示などと解されてきた²。この箇所がこのような解されるのは、ここでヒュームが否定する「理性的根拠」が、ヒューム多くの箇所でも批判する狭義の合理主義的・論証的理性のみならず、ヒュームの哲学自身が依拠する広義の推論能力、すなわち蓋然的理性にまで及んでいるからである³。これに対し、多

¹ 慣例に従い、『人間本性論』からの引用は、Tの後に巻、部、節、および段落番号を、『人間本性論摘要』からの引用は、Aの後に段落番号を付す。また、『人間知性研究』からの引用は、Eの後に節、(部)、および段落番号を付す。傍線は引用者による強調、[]は引用者による意味の補足。以後同様。

² 最も典型的なものとしてラッセルの哲学史の教科書が挙げられる。Russell, B. (1946). *A History of Western Philosophy*. George Allen and Unwin Ltd.

³ この箇所での「理性」の範囲をめぐる解釈については久米(2005)の解釈に準ずる。狭義の論証的理性のみを指し、ヒュームはここで合理主義的見解のみを攻撃しているとする、Beauchamp and Rosenberg(1981)の見解の誤りが、Garrett(1995)および久米によって指摘されている(久米(2005), pp.88-94)。ここでの「理

くのヒューム研究者によって、ヒューム自身が因果的信念を実際に受け入れているという事実に基づき次のように反論されている。すなわち、この箇所では因果推論が理性に基づくという反事実的仮想を行った上でこれが否定され、むしろ因果推論は観念連合の原理という想像力の働きに基づくという事実に基づいて行われているのであり、因果推論そのものの基盤を奪い去るような懐疑論が主張されているのではない⁴。

本発表では、概ね支持されているこの理解を前提した上で、それでもやはり、原因と呼ばれる対象から結果と呼ばれる対象への移行の理由を、如何なる意味においても我々が理解することができない、という事態に改めて注目する。そして、「理由がなくても」(T 1.3.6.12) 成り立つような観念同士の「自然な」連合原理に基づくとされていることの意味が、推論の移行の「一瞬性」に見出されるという結論を導く。

ただし、この箇所の「基づく」という言葉の意味を探る際、今一つ注意を留めておくべき重要な点がある。ヒュームが該当箇所に先立って述べる、「我々がある対象の存在から他の対象の存在を推理できるのは、ただ『経験』のみによる(by EXPERIENCE only)」(T 1.3.6.2) という大原則である。原因とされる対象には、何らの産出的原理や力能といった観念は認められない。それに先立つような印象が認められないからである(T 1.3.14.3-7)。また、神や我々の意志を大元の原因とみなした場合でも、同じ理由でそのような観念は見出されない(T 1.3.14.8-12)。さらに、後述するように産出的観念が知覚はできなくとも論証的に証明できるとする議論も退けられる。『人間知性研究』において平易な仕方では表現されているように、「完璧な理性的能力を持つと想定されているアダム」の理性的能力を持ってしても、彼の「アプリアリナ推理」からは「水の流動性や透明性から、水が彼を窒息死させるであろう」といった知識は得られない(E 4.1.5)のである。本発表は、結論として観念の因果的移行の本性に観念連合の生存的本能という性質を見出すものであるが、これは以下の理由によってアプリアリズムを導くものではない。

確かに、ヒュームは生得観念を否定するロックの説を基本的に支持する。しかし、『人間本性論摘要』において端的に次のように言われる。

[全ての単純観念がそれに先立つ印象に対応するというヒュームの] 命題は、ロック氏が骨折って確立しようとした生得観念はないという命題と等しいように思われるが、(中略) 彼 [ロック氏] は我々の知覚の一切を観念という語のもとに含めているが、この意味では [ロック氏の命題は] 偽である。より強い知覚ないし印象が生得的であり、

性」の範囲が蓋然的理性にまで及ぶという見解は概ね支持されており、本発表でもこの見解を支持する。

⁴ 久米(2005), p.87

自然な情愛、徳への愛、恨みその他一切の情念が自然本性から直接生じることは明白だからである。(中略) 我々の全ての情念が一種の自然的本能であり、それが由来するのは、人間の心の始源的構造(original constitution)に他ならない。(A 6)

例えば我々が快を追求し不快を忌避するといった基本的性向さえもが、必ずしも経験的に確立されるのでなければならぬことが主張されているのではない。ヒュームの経験論は、因果関係の観念といった、哲学的考察に付される観念にはその起源として経験されていたはずの印象があるのでなければならぬ、というヒューム自身の哲学の探究方針として提示されているものである。我々の人間本性に備わっている自然な性質は当然のものとして認められているのである。それゆえ、生存的本能がこのような根源的性質として考えられる可能性はここに開かれる。このことを確認した上で、以下でヒュームの議論を詳しく検討する。

2. 原因から結果への移行が想像力（観念連合）に基づくとは？

問題箇所のヒュームの結論は、原因の観念から結果の観念への移行が理性に基づくのではなく、観念間の自然な結合原理たる想像力に基づくということである(T 1.3.6.4-16)。ここでのヒュームの主張は、①「因果推論は理性に基づかない」(T 1.3.6.5-11)ことと、②「因果推論は想像力に基づく」(T 1.3.6.12-16)ことに分かれている。上で述べた理由から、ここでは②「因果推論は想像力に基づく」という主張に焦点を当て、この主張の真意をまず検討しよう。

ヒュームはこの箇所で我々が原因から結果へと推論を進める時の、その移行の「本性(nature)とは何か」(T 1.3.6.3)というやや多義的な問いを設定する。しかし、以下の記述を元に、ここでの問題とは、我々がある現前する印象から別の特定の観念へと思考を正しく移行させるのは何故か(何に基づいているのか)であることが分かる。まず、ここでヒュームは「感覚」(the sense)、「理性」(reason)、「想像力」(the imagination)という認識の起源(T 1.4.2.2)を用意し、どれがこの移行を決定するか(determine)を順次検討している⁵。そしてその結果、因果推論は「ただ[想像力における]観念の結合にのみ基づく(depend)」(T 1.3.6.12)と結論づけられることになる。

この結論に至る議論は以下の通りである。まず理能力の検討が行われその不可能性が判明することになる。ヒュームによれば、因果推論が理性によって基礎づけられていると仮定した場合、「経験されなかった事例は、経験された事例に必ず類似し、自然の歩みは、常

⁵ 感覚能力が検討され却下されるのは T 1.3.2。

に一樣であり続ける」(T 1.3.6.4)という「自然の斉一性原理」に基づくとされる。しかし、この原理を仮定した場合、我々の理性的能力たる「論証的推論」、「蓋然的推論」のいずれによってもこの原理が導出できないとされる。「論証的推論」は矛盾を許容しないため、矛盾なく「経験されなかった事例」の反対事例の想定を許容する「自然の斉一性原理」の基礎とはなり得ない(T 1.3.6.5)。また、「蓋然的推論」、すなわちヒュームがここまで問題としてきた因果推論そのものが、「自然の斉一性の原理」を基礎づけている可能性は、「同じ一つの原理が他のものの原因であると同時に結果であることは、不可能」(T 1.3.6.7)なため却下される。この議論は帰納的推論が演繹的にも帰納的にも正当化されえないという懐疑論としてしばしば理解される⁶。しかし、この議論はあくまで部分的結論を成すのみであり、この議論からヒュームが消去法的に「対象の観念を連合させ想像力においてそれらを結びつける諸原理」「にのみ基づく」(depends solely on)(T 1.3.6.12)としていることに注意を向けるべきである。

この想像力における連合原理とは、『人間本性論』の導入的議論において言及される、「類似」、「隣接」、「原因と結果」という三性質に区分された観念連合の原理である。ヒュームは『人間本性論』の探究の導入として、我々の人間本性の基礎的性質として、あらゆる感覚知覚、心的想念の対象を指す「知覚」を「印象」と「観念」に分類し、両者を活気の多寡において区別し、「全ての単純観念はそれに先立つ印象から生じる」(T 1.1.1.7)という経験論の原理を打ち立てる。その上で、人間本性には、観念同士が上記三種類いずれかの性質を共有するときに、想像力において自然と結合する仕組みがあるとされている(T 1.1.4.1)。上述のように想像力は矛盾を伴わない限り自由に観念間を移行することができる。「思惟は、諸対象を眺める際に極めて不規則に動くことが明らかであり、何の決まった方法も順序もなしに、天空から地上へ、宇宙の端から端へ、跳ぶことが出来る」(T 1.3.6.13)というのがヒュームの「想像力」の大前提的理解である。しかし、そうした中にもこのような「統合ないし凝集の原理(principle of union or cohesion)」(T 1.1.4.6)があるのであり、「穏やかな力(a gentle force)」(T 1.1.4.1)、ないし「一種の『引力(ATTRACTION)』」などと表現され、これが「精神界において、自然界におけるのと同様に、驚くべき結果を産み出す」(T 1.1.4.6)とされる。

ここではさらに、『人間本性論』においてはこの原理をこれ以上遡っての説明が不可能とされている点に注意を留めておきたい。この原理の「原因は、ほとんど知られず、人間本性の根源的性質(original qualities)に帰する他はないが、私にはそれを解明するつもりはない。真の哲学者に最も必要なことは、原因をどこまでも探究しようとする節度のない欲求を抑制することである」(T 1.1.4.6)とされている。

⁶ Popper, K. R. (1972). *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Clarendon Press, p.4

それでは、ここで言われている、「因果推論が観念連合に『基づく』」とは、どのような事態を指すのであろうか。通説では、このことはそれほど議論されることなく、「習慣」という概念によって言い換えられ、『人間本性論』同巻同部第十四節における、必然的結合の観念の解明に関わる議論への橋渡しとして考えられている。木曾は、上で見た第六節での因果推論の理性的根拠が否定される議論を受けて、ヒュームが「仕方なく」この箇所、「対象 A と対象 B の間の『必然的結合』」の問題を「対象 A の印象」と「対象 B の観念」との間の観念連合の習慣的形成に伴う「必然的結合」の問題に置き換え、第十四節において、精神において「対象 A の印象の観念」から「対象 B の観念の観念」を思い浮かべるように決定されているという「内的な被決定性の印象」を主張し、これに失敗したとする⁷。この見解は、これまで見てきたヒュームの議論が「必然的結合」の観念の発見を目的とし、「観念連合の原理」を「観念同士の随伴の観察の習慣」と捉えることを前提するという、ごく通説的な理解と言える。

もちろん、発表者もこの前提的理解を根底から覆す意図は全くない。しかし、以下で順次見てゆくように、ここでの「因果推論が観念連合に基づく」というヒュームの結論が、必ずしも、「必然的結合」の観念の発見のみを目的とするものではなく（次節）、また、「観念連合の原理」は、必ずしも「習慣」と置き換えられるだけの意味内容しか持たないものではない（次々節）、と考えられる。

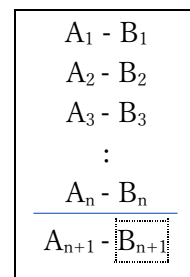
3. 因果推論の瞬間処理プログラムの側面

ヒュームは因果論を開始するにあたり同部第四節から第八節にかけて、「我々はなぜ、特定の原因が特定の結果を必然的に持つ、と結論するのか」(T 1.3.2.15)という問題を問う。従って、原因と結果との間の必然的結合の観念の解明は当然該当箇所のテーマとなる。しかし、同部第五節において、推論が構造的に分析され、①「最初の印象」、②「[この印象と]結合している原因または結果の観念への移行」、そして③「この観念の本性」の三つが考察の対象とされており、問題の同巻第六節は②「印象から観念への移行の本性」(T 1.3.6.3)が問題とされていることに今一つ注意を向けるべきである。必然的結合の観念はむしろ、この先の③「この観念の本性」で主題的に扱われる、と見るのが妥当である。それでは、この「移行の本性」が観念連合に基づく、とは如何なる事態を指すのか、以下の引用に基づき検討する。

⁷ 木曾好能「解説—II ヒューム『人間本性論』の理論哲学」. D. ヒューム著・木曾好能訳. 『人間本性論 第一巻—知性について』(367-616 頁). 法政大学出版局(1995), pp.379-80

我々がある対象から他の対象の存在を推理できるのは、ただ「経験」のみに拠る(by EXPERIENCE only)のである。(中略)我々は、我々が「炎」と呼ぶ種類の対象を見たこと、そして我々が「熱」と呼ぶ種類の感覚を感じたことを、覚えている。また我々は、これらの対象が、過去の全ての事例において恒常的に随伴していたことをも、覚えている。我々は、それ以上の手続きを何ら要さずに(without any further ceremony)、一方を「原因」、他方を「結果」と呼び、一方の存在から他方の存在を推理するのである。(T1.3.6.2)

ここで言われていることは次のようなことである。例えば、図のように A_1-B_1 、 A_2-B_2 ..といったペアの恒常的随伴を経験してきた人が A_{n+1} という現前印象を経験した時に、 B_{n+1} という観念が自然と生起すると言われる。この B_{n+1} の出現が過去の同種の $A-B$ という経験のみに基づいている、というのがここで言われる「経験」の意味として考えられる。



それでは、この経験的基盤にはいかなる前提的原理が要素として必要になるか、さらに分析してみよう。まず、「類似」と「隣接」を認識出来る前提的原理が認められる。すなわち、この図のような秩序的理解可能となるためには、 $A_1A_2A_3$..同士、 $B_1B_2B_3$..同士が類似性によって関連づけられていることが認識される必要がある。また、 A_1 の後に B_1 が、 A_2 の後に B_2 が出現した、という観念同士の時間的隣接の関係においてこれらが関連づけられているという理解も同様必要である⁸。上で見たように、観念連合には「類似」と「隣接」という性質が認められるため、「因果推論が観念連合に基づく」と言われる時に、これらの意味がまず考えられる。

「類似」、「隣接」という性質の観念連合の原理によって、我々の記憶に図のような知識が集積される条件は揃ったと言える。一見したところ、「経験」とはこのような集積された知識に尽きるように思われる。しかし、果たして我々は実際にこのような知識を持ち合わせるだけで、「自然に」推論できるようになるであろうか。我々は一々過去の記憶から A_1 から A_n までの類似性、 B_1 から B_n までの類似性を参照し、それぞれの機会における $A-B$ のペアが時間的に隣接していることを参照し、初めて A_{n+1} という現前印象を経験した時に、 B_{n+1} という観念を生起させるような複雑なプロセスを常に日常的な思考において行っているのだろうか。

上でも引用したように、我々は例えば過去に「炎」と「熱」との恒常的随伴を経験してい

⁸ 残された観念連合のうちの「因果関係」は、言うまでもなく、「類似」、「隣接」と同様には上の図の前提として機能しているとは考えられない。上の図における A_1-B_1 から A_n-B_n のペアは全てそれぞれにおいて単なる時間的隣接関係においてのみ理解されているものであり、 A_{n+1} から B_{n+1} への移行が起こる時に初めて、両者が因果的に結びつくことを示すものだからである。

れば、「それ以上の手続きを何ら要さず(without any further ceremony)、一方を『原因』、他方を『結果』と呼び、一方の存在から他方の存在を推理する」(T 1.3.6.2)とされる。そのプロセスは瞬時に成され、我々自身には一切プロセスとしてさえ認識されていないのである。このような瞬間的処理プログラムの側面が我々に備わっているのではない限り、因果推論が日常的に使用されることは決してできないはずである。以下において、これを可能とするとヒュームが述べている「習慣」の思考省略機能について考察するが、この思考省略機能だけではこれを行うには不十分な側面があることを指摘する。

4. 「習慣」による思考省略機能とその限界

ヒュームはいくつかの箇所で「習慣」の働きを「思考の省略」と位置付ける記述を行っている。

我々が、特定の音を聴いた時に、過去の経験を反省し、その音に通常どんな観念が結び付けられていたかと考えることは、絶対に必要であるわけではない。想像力は、ひとりでにこの反省の代わりをするのであり、その語からその観念へ移行することを習慣づけられていて(accustom'd)、語を聞く事と観念を抱くことの間、一瞬の遅れも置かないのである。(T 1.3.6.14)

また、ヒュームは同巻第一部第七節における抽象観念論において、いかなる抽象観念も、何らかの個別観念によって代表(表象)(represent)されているに過ぎないことを主張する。その際、様々な性質の個別観念(例えば、正三角形、二等辺三角形、不等辺三角形など)から抽象観念(例えば、辺や角の比が確定していないと想定されるような「三角形」の一般観念)が代表されるプロセスとして、「習慣」の「思考の省略」機能が詳しく説明されている。それによると、例えば我々が「三角形」という語を聞いたときに「正三角形」の観念を精神に現前させたとする。しかし、実際にはこの時、他の性質の多くの三角形がしばしば適用されたという想定(suppos'd)に基づき、他の三角形は「ただ軽く精神に触れ」(only touches the soul)られ、我々がそれらの三角形を通覧(survey)して得た習慣を呼び起こす(revive)、つまりただ可能的にだけ(only in power)精神に現前させ、必要に応じてそれらを呼び出せるよう身構えている(keep ourselves in a readiness)のだ(T 1.1.7.7)という精神プロセスが記述されている。この説明は因果論における習慣の働きにも適用可能だろう。

これらのことから、上で問題としたような因果推論の瞬間処理プログラムの側面は、我々の精神が恒常的随伴を経験する中で、習慣の働きにより理論上必要な思考プロセスが省略された結果のものとして、一見したところヒュームの理論に内在的に説明されうる。また、

後述する「本能」に関連する事になるが、ヒュームは実際に、「どんな現象にも慣れさせる習慣の力」こそが、我々を驚嘆させるところの動物の本能に比肩する、我々の持つ「本能」なのだとしている(T 1.3.16.9)。

しかし、果たしてこのような思考省略機能のみで、上記因果推論の瞬間処理プログラムが実際に十全に説明可能であろうか。ここでは、因果性の起源が原初的な「反応」にあるとするウィトゲンシュタインの考えを引き合いにした、ノーマン・マルカムによるヒューム因果論の批判を検討することによって、この問題を深めよう。ここでは、明らかにヒュームの因果論を念頭に、二事象の恒常的随伴に「納得」して初めて二事象が原因と結果の関係にあることが理解されるというプロセスが、我々の実際の因果関係の運用の説明としては「あまりに知的すぎる」とされる。これに対し、ウィトゲンシュタインの「原因と結果」における見解が引用され、ある子供が別の子供に倒されたときに思わずその子供に殴りかかるといった、何らの推論の介在しない「直接的な」「反応」こそが因果性の「起源」だとされる。ヒュームの言うような因果的言語はむしろ、人が成長してから獲得される、「疑い、仮説、テスト、実験、理論」を含意する因果性の「第二次的特徴」⁹だとされる¹⁰。

これに対しては、久米も指摘するように、マルカムはヒューム因果論の本質的な部分の理解を損なっていると言える。上で見たように、「因果推論が観念連合に基づいている」と言われる時に意味されることは、我々は随伴の「理由がなくても」自然に、原因とされる対象と結果とされる対象とを想像力において連合させているのである。この意味において、むしろヒュームの見解とウィトゲンシュタインの見解とは親和的なのである¹¹。しかしそれでもやはり、ヒュームは過去の恒常的随伴という経験的認識と、推論の一瞬性との間のギャップの説明責任を負っていると言える。

なるほど、我々は例えば熱いヤカンに囚らずも手が触れてしまった時に、条件反射的に手をヤカンから離すが、このような「反応」的側面をヒューム因果論はどう説明するのか。また、子供の明らかに反省的考察が介在していないような因果的「反応」を、ヒューム因果論はどう説明するのか。以下で明らかとなるように、これらに対するヒュームの説明は一貫して「習慣」によるものとなる。しかしこの「習慣」概念には、上で見たような単なる「思考の省略」という意味以外の含意があることが、『人間知性研究』の記述から明らかとなる。この『人間本性論』においては影を潜めている習慣の「生存的本能」という側面こそが、上の二つの問題に対する応答として機能していることになる。

⁹ Wittgenstein, L. (1967). *Zettel*, ed. by G. E. M. Anscomb and G. H. von Wright, translated by G. E. M. Anscomb, Oxford, 9-10/21

¹⁰ Malcolm, N. (1986). *Nothing is Hidden: Wittgenstein's Criticism of his Early Thought*, Oxford, p.149

¹¹ 久米暁 (2009). 「アポステリオリな必然性——ヒュームとウィトゲンシュタインを手がかりに」, 『関西学院大学文学部哲学研究室哲学研究年報』 . v.42, pp.19-20

5. 『人間知性研究』における生存的本能への言及

ここでは、上で挙げた二つの問題、すなわち我々の日常生活においても時として出会す条件反射的因果反応¹²、そして子供の無思考的因果反応¹³をヒューム因果論はどう説明するか、という問題を順次取り上げる。結果的に、これらは同じ習慣の「生存的本能」という側面において説明されることになる。

第一の問題について、『人間知性研究』には次のような記述がある。

剣が私の胸に向けられる時、一杯の葡萄酒が私の前に差し出された時よりも力強く、傷と痛み¹⁴の観念が私[の心]を打たないであろうか。たとえ、たまたまこの[傷や痛み]の観念が後者の[一杯の葡萄酒という]対象の現れた後で起こるとしても、である。(E 5.2.20)

ここでは、「剣」が現前した時に想起される「傷や痛み」の観念が、「葡萄酒」が現前した時に想起される観念よりも力強く精神に現れることが問題とされている。しかし、両者の観念の現れには、何らプロセス的な差異はないとされる。「従って、これを説明しうるような何らかの類比を見出せれば、それで満足」(E 5.2.20)なのだとして、次のような自然の行程との予定調和が語られる。

従って、ここには、自然の行程と我々の観念の継起との間に、一種の予定調和(pre-established harmony)があることになる。そして、前者を支配している力能や力は我々には全く知られていないけれども、それでも、我々の思惟や想念は、やはり、自然の他の産物と同じ筋道を歩み続けてきているのを我々は見出す。(E 5.2.21)

さらに、この「予定調和」を統べると言える目的論的世界観に言及される。ヒューム自身は目的因を明確に否定している(T 1.3.14.32)にも拘らず、である。

それは、我々の種の生存、および人間生活のあらゆる状況や出来事における我々の振る舞いの規制にとって極めて必要なものである。もし仮に、ある対象が現に現れていても、それと通常接続している諸対象の観念が直ちにそのことによって喚起されることがなかったとしたら、我々の一切の知識は、我々の記憶や感官の狭い領域に限られていたに

¹² 『人間本性論』においても言及はある(T 1.3.8.13)が、ここで問題となる抱かれる信念の強さは論じられていない。

¹³ 『人間本性論』においても同様の言及がある(T 1.3.16.3)。

違いない。(E 5.2.21)

ヒュームは『自然宗教に関する対話』においてライプニッツを「(自説と) 近しい著者」(D 10.6)と称しており、この箇所もライプニッツの心身問題における予定調和説が念頭に置かれていることが知られている¹⁴。言うまでもなく、ヒュームは神による予定調和を認めないが、その役割を自然に帰し、我々の因果推論の依拠する「自然的本能」を、生存の必要性において説明している。このように、『人間本性論』における不可知的な根源的性質としての観念連合から一歩進み、『人間知性研究』では、習慣の働きに「生存的本能」という性格が付与されているのである。

第二の問題に関しても、我々の理性(広義)の「働きは緩慢で、幼少期の最初の数年間は、いかなる程度においても現れることがない」(E 5.2.22)ことと比較され、成人のみならず、子供や動物の因果推論を十全に基礎づける観念連合が次のように特徴付けられている。

何かある本能ないし機械的な傾向性によって、かくも必要な心の働きを安全に確保しておく方が、自然の通常の知恵により適っている。こうした本能ないし機械的傾向性の方は、その働きが不可謬でありうるし、生命や思惟が最初に現れる時に出現しうるし、そして知性の骨の折れる推断の一切とは独立でありうるのである。(中略)自然は、自らが外的事物の間に確立しておいたものと一致対応する行程を思惟が前進するように仕向ける本能というものを我々のうちに植え付けたのである。(E 5.2.22)

我々が動物と共有し、生活の振る舞い全体が依存する実験的推理そのものが、一種の本能あるいは我々自身にとって知られない仕方で我々のうちに働く機械的力能(mechanical power)に他ならない。(E 9.6)

これらの働きは全て、一種の自然本能(natural instinct)であって、推理すなわち思惟や知性の過程が生んだり、妨げたりすることのできないものである。(E 5.1.8)

人に火を避けるように教えるのはやはり本能であり、それは、鳥に、孵化の技術や雛を育てる仕組みと秩序の全体を、かの厳密さで教える本能と同じものなのである。(E 9.6)

いずれのテキストも、因果推論が依拠する精神機構として、動物や子供などにおいては能力の緩慢さが現れる理性との対比において、より人間本性に根源的で不可謬な能力として、観念連合の原理とそれを支える習慣の働きについて「自然的本能」という性格を付すものと言

¹⁴ David Hume, *An Enquiry Concerning Human Understanding*, A Critical Edition, ed. By Tom L. Beauchamp. 2000, Part 3, Annotations to the Enquiry, 5.21, p.231

える。

とはいえ、因果推論の経験的基盤を強く主張するヒューム因果論にあつて、この記述は、我々あるいは動物が経験に先立って火を避けるべき知識や子孫を残すための知識をアプリオリに知っている、という誤解を導きかねない。『人間本性論』においては都合の良いことに影を潜め、『人間知性研究』においてのみ提示されているこの「生存的本能」は、ともするとヒュームの経験論の根底を覆しかねない危険な概念でもあるのである。

6. 生存的本能の役割

しかし我々は今や、「生存的本能」の機能をヒューム因果論体型の中のごく局所的な部分に、限定的な意味において位置付けることが可能である。すなわち、通常ヒューム因果論において想定されているような十全に準備された理想的な恒常的随伴の実験的状況とは程遠く¹⁵、一瞬の思考も許されないような状況、あるいは生存の危機に直面しているような特殊な場面である。

例えば我々のみならず、恐らくあらゆる動物は、ヤカンなどの熱いものに囚らずも触ってしまった時、「その熱いものが何であるのか」「どう行動すれば良いのか」等の一切の思考に先立ち、とりあえず手を離す、という危険回避行動を行う。ウィトゲンシュタインの言うようにこうした行動には、瞬間的、「離れる」「食いつく」等の単純さ、そして前思考的という特徴が挙げられるだろう。ウィトゲンシュタインは、こうした「反応」こそが我々の因果的言語使用の原初形態だとする一方、少なくともヒューム因果論の説明体系はそのような形を取るものではない。結局のところ、ヒューム因果論が誇る精神メカニズムの心理学的分析に見られるような明晰さにおいては、このような局所的状況における推論の移行の一瞬性は説明されていないと言えるだろう。「生存的本能」はむしろ、それ以上説明できないような人間本性の究極的な原理だと言える。

しかし我々は、日常性という安定的な土台の上で暮らす中で、時として間一髪で怪我や事故から免れたり、怒りに満ちて思わず手が立ってしまうような局面に遭遇する。こうした時に我々は、野生動物は常にこのような生存の危機に立たされており、我々も時として突然このような局面に襲われ、実は生存が極めて根本的で重要な目的であることに気づかされる。このような意味において、ヒュームの「生存的本能」は、我々の日常性においては影を潜めているようなプリミティブな実存的側面を表現する概念だと言うことができるだろう。

¹⁵ 『人間本性論』において、これに類する言及がある(T 1.3.9.16)。

結語に代えて

本発表は、ヒュームの『人間本性論』においては影を潜め、『人間知性研究』において断片的に現れる「生存的本能」の役割を明らかにするものであった。ヒュームの「生存的本能」は、ともすればアプリオリズムを導きかねない、危険な概念であるが、我々の日常性においては影を潜めているような、咄嗟の判断が迫られるような場面において、我々が理性的な人間であることの前に、生存を大前提とする動物的本性を備えていることに気づかせてくれる概念である。

この一連の探究は、ヒューム因果論において散見される規範的コミットメントに合理的な説明を与える目的の下、因果論においてヒュームが明示的には語っていない前提的理解を明らかにする、というプロジェクトの一部分に位置付けられる可能性を持つものと言える。

テキストおよび参考文献

1. Hume, D. (1739-40). *A Treatise of Human Nature*, ed. by D. F. Norton and M. J. Norton, Oxford, 2000.
2. ----- (1740). *An Abstract of a Treatise of Human Nature*, ed. by D. F. Norton and M. J. Norton, Oxford, 2000.
3. ----- (1748) *An Enquiry Concerning Human Understanding*, A Critical Edition, ed. By Tom L. Beauchamp, Oxford, 1999.
4. ----- (1779) *Dialogues concerning Natural Religion and Other Writings*, ed. by Dorothy Coleman, Cambridge, 2007.
5. Wittgenstein, L. (1967). *Zettel*, ed. by G. E. M. Anscomb and G. H. von Wright, translated by G. E. M. Anscomb, Oxford,
6. Russell, B. (1946). *A History of Western Philosophy*, George Allen and Unwin Ltd.
7. Popper, K. R. (1972). *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Clarendon Press.
8. Beauchamp, T. L. (2008). 'The Sources of Normativity in Hume's Moral Theory' in *A Companion to Hume*, ed. by Elizabeth S. Radcliffe, pp.493-512
9. 木曾好能. (1995). 「解説—II ヒューム『人間本性論』の理論哲学」. D. ヒューム著・木曾好能訳. 『人間本性論 第一巻—知性について』(367-616頁). 法政大学出版局.
10. 久米暁. (2005). 『ヒュームの懐疑論』, 岩波書店.
11. 久米暁. (2009). 「アポステリオリな必然性—ヒュームとウイトゲンシュタインを手がかりに」, 『関西学院大学文学部哲学研究室哲学研究年報』. v.42. pp.1-26, 関西学院大学哲学研究室.
12. Malcolm, N. (1986). *Nothing is Hidden: Wittgenstein's Criticism of his Early Thought*, Oxford
13. Garrett, D. (1997). *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, Oxford University Press.
14. Beauchamp, T. L. and Rosenberg, A. (1981). *Hume and the Problem of Causation*. Oxford.
15. Loeb, L. E. (2002). *Stability and Justification in Hume's Treatise*, Oxford.
16. Laing, B. M. (1926). 'Hume and the Contemporary Theory of Instinct', *The Monist*, Vol. 36, No. 4, pp. 645-666.

17. Winters, B. (1981). 'Hume's Argument for the Superiority of Natural Instinct', *Dialogue: Canadian Philosophical Review*, v.20, pp.635-643
18. Spector, J. (2003) 'Value in Fact: Naturalism and Normativity in Hume's Moral Psychology', *Journal of the History of Philosophy*, V. 41, N. 2, pp. 145-163.
19. Weintraub, R. (2002). 'Hume's Associations', *Hume Studies*, V.28, N. 2, pp. 231-246.
20. de Pierris, G. (2002). 'Causation as a Philosophical Relation in Hume', *Philosophy and Phenomenological Research*, V. 64, N. 3, pp. 499-545.